つても宿は無し詮方が無いから此峠を越すかな　權「越すに爲た所が迚も此腹じやア動かれません　八「左樣さ腹さへ出來て居れば辻堂で寢やうが闇覽堂へ寢やうが搆わないが腹が減つちやア困る」愚痴を眦しながら兩人共にスタ〳〵昇つて來ると道の皿しい昇つたり降つたり、下つたり登つたり向ふに燈火が見へたかと思ふとフツと消て仕舞う、消たかと思ふと明かに成る、剛膽な人だから憶する氣色も無く昇つて來ると十人はかり色々の身拵をなして車座に成つて燃火をして居る八郎先生是を見て　八「ヲヽ野里氏盜人だ　權「左樣盜ツ人らしい　八「燃火の中に鍋が掛つて酒宴をして居る樣子だが好い臭ひがする何か煮て居やアがる　權「ヲヽ煮て居る〳〵那の鍋の中の物を喰ふじやア無いか盜賊の物だつて何んだつて搆やア爲ない命を取るのは惡然だから押拂つてやらう　八「夫が好い大分貧乏德利が並んで居る那の中に

酒が澤山這入つて居るに相違無い……ア、德利を火の上へ乘せて火燵を爲て居やアがる火燵は亦旨いれへ、アヽー腹が減つた、空加減の好い所へキユーと飲んだ日にやア堪へられたものじやア無い、然し那所へ大小を差て行く と殺生爲なくつちやア成らんから大小を隱して兩人で往つて奴等を脅迫して置て一杯飲んで……飲みさへすりやア好いのたから殺生は爲たく無いが那奴等の方に萬一鐵砲の用意があつちやアかなわない、飛道具があつた日にやア吾々も累卵いから鐵砲かあるか無いかを見屆けて腹を拵へやう　權「如何にも仰せ御道理、左樣なれば……」と兩人共拔足をして傍の木の影に密と大小を御置きなすつて八郎は外に平生携へて居る六尺の樫の棒も夫へ差置て後から差覗くと飛道具は無いらしいから安心をして十人ばかりの人体を見ると一人樹の根の切つた上へ腰を掛けて熊の皮の胴服を着込んで髯のモヤ

〳〵と生た強さうな是が盗ッ人の頭らしい、其傍に一人色の白い是も山刀を落差にして居る二十八九に成る奴が座つて是も中々威張つて居ります、前へ盃を置て皆がブ〳〵飲みながら鍋にはグツ〳〵煮付て居る、未だ酒も始め立てだと見へて然う取散して無い、八郎は後から一番中の強そうな頭立つた奴の右と左りの脇の下へ手を掛けて　八「ドツコイショ……」と抱上げ傍へ下して自分が其所へ腰を掛けた樽三は二十七八の色の白い奴を矢張り傍へ退けて其跡へ座を占めました　八、樽「アヽー暖かい　甲「ヤイ〳〵ヤイ何んだ汝達は突然來て乃公を片附けやアがつて　八「ガツ〳〵云ふな云ふな寒くつて詮方がないから此所へ腰を掛けて當るんだ　甲「暖まらして貰うなら貰うで好いから何んとか云へ大きなズーテイを爲やアがつて恐ろしい色の眞ッ黑けいな奴何んだ汝ェは……全体汝達は此大勢を何んだと思つ

て居るんだ　八「左樣さ十人が此所へ集つて今頃燃火をして酒を飲んで居るからにやアマア盗賊だな　甲「土坊だと知つて居るのか　八「知られへたつて詮方が無い、知つて居る　甲「ヨシ如何にも汝ェの云ふ通り乃公達は土坊だ、汝ェ達を只通すことは出來ない、金子があるだらう……金子と衣服と大小を置て行け　八「成程察しの如く金子はある、金子をやらう……金子はあるけれども替物は御免蒙りたい、和郎方は斯うして火を燃て當つて居るのは寒いから當つて居るのだらう、乃公も寒いから當つたのだ金子は皆んな出すけれども着物は勘辨して呉れ、金子は澤山は無いけれども二人で三百兩ある　甲「ナニ金子が三百兩ある　八「三百兩ある　甲「眞實の金子か三百兩の書物じやアは無いか　八「サ此胴卷にある、此方に二百兩、此方の胴卷に百兩、小出しの金子も此通りある好いか此方に紙幣と

銀貨が這入つて居る、其頃然んな者は無い　甲「ヨシ〳〵確かに貰つた出しつ振が好いから金子だけで着物に負けてやらう、金子と小出しの錢まで取つて仕舞やア汝等の着物を其儘賣つた所が三兩とは成られへ一兩か其所等の品物、吳れてやるから行け　八「へイ有難ふ存じますでございます、時にお土坊さん腹が減つて詮方が無いんですが其お酒を少し飲ましちやア下さいませんか　甲「贅澤を云やアがるなア飲ましてやれ　乙「飲め〳〵　櫨「有難ふ存じます　八「同じ頂戴いたすのならモー少し大きな盃はございませんか　甲「是で飲め」と三合の盃を出した　八「へイ有難ふ存じます」と兩人で三合入の盃でキユー〳〵……と二三杯引掛けた　甲「能く飲みやアがるなア何うも徳利を五本明けちまやアがつたぜ　八「其鍋の中にジヤ〳〵煮て居るのは何んでゲせう　甲「鍋の中は鷄だの豚だの……　八「結構でゲス

なア　甲「なぜ蓋を取るんだ　八「脂立つて旨そふだ一杯御馳走して頂きたい　甲「詮方が無へ奴だなア　八「序でに便を一杯　甲「よそつてやれ〳〵居酒屋へ來た氣に成つて居やアがる　八「へイ何うも御馳走樣でございます辱けない」と櫨三と八郎は飯をバク〳〵喰つて　兩人「先づ腹は出來たし脅迫したくも腹が出來れへ内は詮方が無い、腕ッ子なら斯んな奴腹が出來て居りやア理由は無へ」と安心をして八郎が　八「盜人　甲「何んだ　八「酒を飲んで飯を喰つちまつて汁まで吸い好い心持に成つたが未だ少し酒が足りないやうだ、酒を御馳走して吳れへか　甲「贅澤をいふな　八「じやアマアこの位へにして置う何うも有難ふございました　甲「ヤイ〳〵汝エ達は其所へ出した金子を何んだつて懐中へ入れて仕舞つたのだ　八「イヤ小出しの金子も三百兩もやる積りなんだ、やる積りなんだげれども腹が滿腹くなつた

ら嫌に成つて仕舞つた　甲「何んだと此ん畜生途法も無へことを吐しやアがつて打た切つて仕舞へ　子分「心得たり」と各々刀を引抜て來る奴を櫨三一人の手ッ首を取捕へて肩に擔いで二間ばかり向ふへ投げました　一同「ヲヽ中々強い野郎……」と云ふ内に關口八郎先生草中に隠した六尺の棒を取直して　八「打殺すのは益無き殺生……」と皆んなの頭の上三分ばかりの所をブーン〳〵と振廻す　甲「ヤー恐怖れへ何んてへ野郎だ兩人共途方も無へ奴だソレ逃げる……」と云ひながらワッ〳〵……と云つて逃出しました

○第十六席

兩人はホッと云ふ息を吐て　八「先づ是で喰徳だ、然し今後斯樣なことは爲

まいれへ先方が弱いから好いけれども強かつた日には仮位ねで命を捨てなければやつたんだ、是からは少々位ゐ早くつても仮を喰ひつこ　八「夫が宜しい、盜人の方でも懲々爲たらうけれども此方も累卵かつた、先づ腹は出來たし旁〳〵するから今少し歩こう」とスタ〳〵來ると一軒の茅屋、表へ燈火が差しますから戸の隙間から覗いて見ると六十四五に成る所の老翁、爐端に端座して頻りに炊火を爲てお出でなさる　櫨「御免下さいまし　老人「ハイ　櫨「手前共は往來をチト取違ひまして難澁をいたします、夜陰に相成つて恐れ入りましたが一夜お泊め下さることは相成りませんか　老人「ヤレ〳〵お氣の毒なこと、手前は斯樣な老人、只一人で山中に居ります者でござるから夜るの物は間に合ないけれどもお泊申して宜しい、夜るの者は間に合なくつても炊

火で身体をば煖めて一夜を明して苦しくないと仰しやればお留め申上げる、酒食共に間に合ひますまいが……　八「結構、左様なことは嫌ひません疲勞れて居りますから休息をいたして參りたい、老「ア、左様かサア〳〵御這入りなされ」といふから　兩人「御免下さいまし」と這入つて來た老人は兩人の姿を見て　老「御兩所共に御修業の御仁と見へる　兩人「左様でございます」足を洗ひ座敷に上つたが邊りの様子は何うも只の人で無い様子、果實が少しはかりあつたものと見へて取出だして呉れた、湯なぞを汲んで呉れるから悦んで兩人爐端へ座り込んで　八「老人貴郎はお一人で是にお出で遊ばすか　老「ハイ　八「左様でござるか」突當りの所に刀掛があつて刀が掛つて居る木太刀抔も並んで居る　八「ハア武術家だな老人も類りに兩人の顔を見て　老「貴郎方は御身体の極つた工合は塾道の能くお出來なさるや

うに御見上げ申す武術修行者でござらう　樓「御意でございます手前は筑後柳川家の臣野里權三と申する者、是なるは主家の客分關口八郎と申す者　老「ハア左様でございますか、手前は世の中を捨て此所に今隱遁の身でございますが、關口順心齋先生とは御懇意を申上げて手前に於ては伊東彌五郎一刀齋の門に入つて一刀流の劍術を習ひ最早七十才の老翁、昔しと今とは大きな違ひでございます　樓「七十歳にお成りなさるか拙者と六十五位ゐと失禮ながら御見上げ申上げた　老「イエモー恐れ入り升　八「シテ御老人何故斯る山中へ隱遁をなさいましたか　老「拙者は何うも運が悪るくつて　八「ハア　老「折角取立てた弟子は不都合なことをして逃げて仕舞ひ詮方が無いから悴に便つた所が悴は死んで仕舞ひ　八「夫は〳〵……お氣の毒な理由　老「手前は元播州赤石に道場を開いて居りました塚田一心

軒と申する者でござる　八「ヘヱ左樣で　樋「ナニ塚田一心軒……　老モシお若いお方手前が一心軒と申したら、何かお考へなすつたがお胸に思ひ當ることでもありますか　樋「御意で……何を隱そう御老体、私父野里源作といふ者を討つたる者は塚田一流軒鐵山と申す者　老「ゲー……其者は拙者の高弟、なか〳〵剱道も可成出來た奴だが早くも慢心をいたした樣子、夫を矯直し〳〵仕立て〻居る内或日拙者の隙を伺つて金銀を奪ひ、吾三卷の卷物を奪つて逐電をいたした然しながら極意の卷物たるや夫れ丈けの價値のある腕前にて見れば成程といふ得德が行くが未だ極意の腕前に成らざるに三卷の卷物を見たとても盲目人が經卷を得たやうな者、更に分るべき道理は無い、去れば頼み難きは人の心、モー世の中が嫌に成りましたに由つて斯く隱遁をいたしました　樋「ハア左樣でございますか、其鐵山と云へる者

の居る所を貴郎御存じはありますまいかな　二「イヤ其後は一面識もいたさない面會をすれば拙者が切つて捨てなければ成らん、由し亦切つて捨てぬに爲た所が何とか夫だけの主意を立てなければ成らぬ、然し爰に萬一其所に居はせぬかと思ふのは鐵山の弟々子美濃の國金花山岐阜の城下から彼是れ二里と少し山奥に這入つた所に駄智木といふ土地がある、其駄智木といふ所に隱れて居る者、申憎いお話しだが元石田治部少輔三成に身方をして關ヶ原戰ひの時に打負け生捕を蒙つて死刑に行なはれた安國寺、是は御身分も御承知のこと、其安國寺の臣下で桑名松右衛門といふ者の悴桑名松之丞と云へる者、是は拙者の弟子で當時駄智木に居る、塚田一流軒鐵山も元來塚田と云ふ苗字ではない、拙者の苗字名前に僞せて塚田一流軒と名乘つた不届き者、彼も是安國寺伊慶の家來、手前縁あつて弟子に爲た者、松之丞とは懇意

にいたして居る、然ふいふ不都合なことをした奴、多分美濃の國金花山稻葉山の奥駄智木の大手百曲り桑名松之丞の方に居りはすまいか、其所へ往つてお尋れなすつて御覽なさい」兩人は聞て大きに打悅びまして　「權」アヽ

辱け無い、是も神の紹介であらうか、我父を殺し金を奪ひ、又己れの師の恩を忘れて三卷の卷物と金を奪つて逐電に及ぶ那れと云ひ是と云ひ捨置く事は相成らん」と腕をさすつて關口八郎野里權三翌日此所へ暇を告げて駄智木の岩屋に尋れ來たり桑名松之丞といふ者の所へ來つて話しをいたす、松之丞兩人に實を告げたに由つて越後の國高田の城下へ乘込んで來つて久方振りに鐵山と對面をいたす權三八郎越後乘込みのお話しは例の次席……

○第十七席

人坂方の殘黨深く山中に在り
兩士に其娘を托す

此駄智木と云ふ所は至つて險岨にして大手百曲りといふ位ゐで、此所には古へから世の中に居憎い人が往つちやア隱れ、段々に人が殖て來て元は微かに二人か三人ほか居ないで山と山の間だを掘つて少しばかり芋を作るやうなことを爲たり何かをして、世の中を漸く避けて居た位ゐな所だ、追々開けて來て當節は可成に人も居る樣子、昔し此所に塚原卜傳といふ大先生が居られたことがある、夫で自然と此土地の人は武藝といふ者を重んじて夫から後男の子が生れると必ず土地に居る先生に就て學ぶから皆劍術が上手に成る、女の兒が生れると劍術は出來ないけれども力量が大層にある、當今でも劍術の出來る先生が居て折々町へ買物に出る、隨分劍術を敎へて呉れろと賴む人があると如何にも敎へやう、敎へるが夜るに爲つて用のない時に來い、敎へてやる抔と云はれる、中々町まで出るには五町や十町では無い、

人里離れた恐ろしい百曲りといふ位ゐな險岨な山道、昇つたり降つたりして行くのだから誰も行く者も無いが然ふいふ理由でございますから此所だけは殆んど別世界の如くに成つて居りまする、何爲ろ世の中を狹めて此所へ來て居る人々故隨分色々な人がある

因みに由つて申上げますが慶安の役由井正雪に組した軍師の一人熊ケ谷三郎兵衛といふ人は此所へ隱れて生涯を送つた人でございます是は後の事ながら序でに申上げて置きまする

夫程恐ろしい所、去れば爰に石田の殘黨安國寺の臣であつた桑名松右衛門の悴桑名松之丞といふ人も世の中を狹めて此所に隱れて居りまする、塚田一流軒は此者と兄弟の交りをいたして居つたから多分は此所に居るだらうといふ、由つて關口正孝、野里權三の兩勇士に於ては鈴鹿の山間を辭し

て不取敢此所を差て來て人に聞ながら段々山中に這入つて來て見ると漸く家が四五軒ほか見へない可成家もあるんだらうけれども那方の谷間に二間此方の山間に三間といふやうな理由だからなか〳〵鳥渡見ては家が十軒とは見へない位ゐ

權「お頼申します　取次「ハイ　權「自分は武術修業の者少々お尋ね申す方があつて此山中に掛りましたが　取次「ハイ……　權「桑名松之丞と仰しやりまする御方は此れにお住ひをなすつて居らつしやるさうですが御存じなれば教へてお貰ひ申したい　取次「ハイ」と答へた其女は色の白い背丈けは餘り高くはないが十人並の婦人だ、美人といふ程でも無いが可成の女　女「ハイ私しには分り兼ねますから只今問合せまする間だ御待ち遊ばして下さいまし　權「是は何うも恐れ入りました」何うも言葉の樣子が百姓町人でもないやうだ、奥へ這入る聽て五十角格のお方が夫れへ

老人「イヤ是は〳〵お尋れに成りましたは誰方かは知らんが拙者が桑名松之丞、未だ御目通りもいたしませんお方、然し態々此穴の中へお尋れに成つたのは御用があればこそお尋れに成つたのでせうからお隠し申すも詮ないこと、サ何うぞ此方へお通りを願ひます　樋「御免下さいまし」と叮嚀に挨拶をして松之丞も始めての挨拶をいたす　樋「手前は立花左近将監の家來野里樋三と申す者　八「手前は立花公の家に客分と成つて罷りある關口八郎と申す者、何分御懇意を願ひます　松「ヲヽ、兼て此山中へまでお名前の聞きましたる關口正孝先生でありましたか　八「ィヱ如何いたして恐れ入ります　樋「偖て桑名氏此方へ參りしは餘の儀にも非ず鈴鹿の山中に於て塚田一心軒先生にお目に掛りいろ〳〵お話しを爲た所が此方に塚田一流軒鐵山といふ仁が居るとの話し、打明けたお話

しが貴郎が御兄弟のお約束をなすつた塚田一流軒鐵山は是れ〳〵云々の次第にて拙者の父源作を大勢の人の手を借りて嬲り切りにいたしましたが拙者に取つては父の仇、由つて諸國を關口氏がお助力を下さるを幸ひ探り居りましたが斗らずも一心軒先生に御目に掛つて段々事の様子を承はれは貴郎は兄弟の如き交りを爲てお出でなされたに由つて大抵は此方に居るであらうとの話し、夫故態々伺ひましたが塚田一流軒鐵山が御當家に居られることとなれば何卒御對面を御爲せ下さるやうに願ひたい、甚だ御無理なお願ひではありまするが如何でございませうか　松「是は〳〵以ての外のことでございまする、其鐵山といふ人は私しと相弟子ではございたが彼の人師匠の三卷の卷を盗んで逐電をいたしました、其以前は兄弟にも無い位ゐの交りを致して居りましたが已れから然ふいふ不都合を爲たに就て拙者の所へ來ること能はず、

暫く疎縁に相成つて居りまする、面會を其後いたしませんでございますが當時いづれに居り升るか決て手前は貴郎方に對して僞り飾り、當人の身をかばうといふ主意ではござらん、折角のお尋れでござるけれども拙者の更に存じません事でござる」と兩人の前にて桑名松之丞と云ふ人がピツタリと言切りました　櫪「成程何うも是非ない所、アヽー困つたものでござる」と愁然として櫪三が首をうな垂れた　松「然しながら彼は越後の國高田の城内に懇意にいたして居る者があるといふ事を常に申して居つたから次第に由つたらば越後の高田に居るかも知れない　櫪「アヽー左樣てござるか夫は〳〵千萬辱け無い、左樣ござらば是より夫へ參つて鐵山の行衛を探すでありませう　松「去すれば必ず手掛りを得やうと存ずる、就ては手前も最早五十の坂を越て大きに老衰に及び此山の中に居つて生涯を終り再び世の中へ出ること

が出來ない、出てからが那れは石田の殘黨であると天下の人に怪しまれなければ成らぬ、然らば自然埋木の拙者、依つて貴郎方がお尋れ下さいましたを幸ひ御迷惑、甚だ相濟んけれども貴郎方へ一ツのお願ひがあるがお聞き下さらんか　八「ハヽア何事でござる　松「手前はモー此所で相果て桑名の家は滅して仕舞うと心得て居るが貴郎方のやうな義務のあるお方がお出でなされたは天より吾に幸ひを與へて下さるに相違無い、私死んだ妻との中に君と申す一人の娘がござる最前お取次をいたした不束の娘だが當年十八才に相成ります、甚だ恐れ入つたことだが那の者を何うかいづれへなりとも御越しの所へお連れ下され下女端た女にでも住込まして其内に當人の辛抱に由つて相當の良人を持たせ何うか桑名の名跡を微かにも立つて頂きたい、嫁したる先が町人にして名字を名乘れずとも我血統さへ殘つて居れば夫で好い、兎に

角桑名の血統を絶すことを惜む某し、何卒櫨三どの八郎どの御身達御兩所を見上げ義に富んでお出である方だに依つてお頼み申す、相當の縁があつたら　ば貴郎方の心に叶つた人なれば何うか足輕小者になりとも宜しいからお遣はしなすつて成可くなれば一合取つても武士は武士、武士の妻に爲たいと存ずる夫も自分の思ふ存分に成る理由ではござらんが宜しう御取斗ひを願ひたい　是は甚だ失禮だが道中諸賂ひ不足ながら金子十兩ありまする是を何うか　娘の路用の足として御納め下さいまし、お父上の仇敵を報をうといふ矢先きに御迷惑な次第であるが御見掛け申して願ひ見込んだのが此方の仕合せ見込まれたのが貴郎の不幸、何卒御聞届け下されたい」と一人の娘を頼まれた、櫨三も八郎も足手纏ひの邪覽者が一人出來た、不都合極つて居るけれども何うも是を強て斷るといふ理由にも不可んものだ　櫨「如何にも承知いた

した然らば」といふので右お君といふ者を連れて行くことに成つたが金子は返した然るに先方も受取らない　松「強て何うかお持ち下さい」といふから　櫨「然らば御緣邊のあつた時に相當に是だけの金子を以てお仕度をして先方に差上げやう　松「有難ふ存じます」三人で駄智水の山中を出て越後の國高田松平伊豫守忠政、此君は越前足羽郡福井からお國替に成つた方、此方に仕へて居るといふ事を承はつたに依つて高田を差て參りました

○第十八席

兩士擊中の玉を逸し
大奸忠に似て主に取入る

高田の御城下は實に御繁盛、旅宿吉田屋德兵衛といふ家へ三人で泊り込んでお茶代を遣はし次第に據れば永く厄介に成ると思ふから家の者にも手當の金子を遣はし亭主が茶代の禮に出て來た時に　櫨「御亭主當城下に塚田一流

軒鐵山といふ人が道場を開いて居るといふことを知らないか　亭「左樣でございますエー何うも一流軒と仰しやるか何んだかは知りませんが中國とか九州邊りのお侍で先頃お召抱へに成りました先生が御あんなさる、矢ッ張り塚田といふ御苗字ださうで私し共は旅宿屋でございますから委しいことは存じません　櫻「アヽー然ふかい　亭「御城中の二本木といふ所に御道場があつて御城中の若い方々が皆んな稽古に入つしやるといふ評判でございます　櫻「ウヽー然ふか……夫は〳〵御城中か　亭「左樣でございます」兩人いたして顏と顏を見合したが城中ぢやア乘込んで往つて討つことは六ケ敷い、萬一人違ひでゝもあつた日にやア當時お氣の立つて入つしやる宰相忠政公何んなことをば仕出かして主家に迷惑に成ることが出來るかも知れない先づ〳〵然ふか然ふで無いか篤と人物を取調べて果して塚田であるなれば町

へ出た所を討たれば相成らぬ」と顏を見合して八郎櫻三口には云はないけれども心に考へた、夫からは只々塚田一流軒なるか將た又他人であるか見届けたいと頻りに手を廻して居りましたが別段にお話しも無く是といふ程のことも無い、一日〳〵と逗留をして居る内に四五日を空しく經ました　男「ヘイ今日は　亭「此りやア源兵衛さんお出でなさいまし　源「好いお天氣でございますれへ　亭「結構なお天氣でございます　源「德兵衛さん御聞申すが御城中の塚田先生の所で先生のホンのお酒の相手をしたり床の上下しをするやうな女があつたら一人世話を爲て呉れろといふ、別に妾といふ理由じやア無へのだが何しろ先生は獨身者、十八九位ゐで極く好い女で無くつても排はれへが夫りやア此方の心持で抱囲をされて好いといふのなら如何程か給金も餘計出やうといふ理由なのだが美麗な女の娘が一人あつたらお世話をして

お吳んなさい　德「アヽ然ふかい、宜しうございますあつたら世話を爲ませう　源「何うか一ッお賴み申します左樣なら（二階でポーン〳〵）德「お二階でお呼びなさるヨ　女「ヘイ……何んでございます」と櫓三の座敷へ……

櫓「那の御亭主にチヨイと御手間は取らせないが顏を貸てお吳れ　女「ハイ……旦那さま六番の御座敷で貴郎に御用があるつて　德「然ふか……ヘイ何んぞ御用で　櫓「外ではないが今町人も和郎と話しを爲て居つたが今の人は何んだい　德「アノ人は何んでございます升吳服屋の若い者でございます　櫓「アヽー成程　德「大坂屋と申しまして其所の若い者、御城中の諸方へお出入りをいたして居ります　櫓「アヽー然ふかい就て今塚田先生の所で女が慾いといふ話しだが　德「御意でございます　櫓「何んと何うだらう和郎に折入つて賴みだが不束な私の妹だが此所に居るが私の妹を一ッ塚

田先生の所の奉公に差上げて吳れる理由には行くまいか、不束の娘だからお妾に上がるの何んのといふ理由には行かないけれども何爲ろ女だから床の上下しお酒のお相手位ゐのことは出來るだらうと心得るが何うだらう　德「夫りやア結構でございますが旦那樣はお武家さま　櫓「イヤ武家の妹だとて苦しくない實は三人共旗巾を無くなして仕舞つて誠に困る、正直武士の娘であると妹であるのと云つては和郎も世話が爲悪くからうから其所の儀は好いやうに取繕ろつて私しの妹だが嫁にやりたくも全で他人の中へ出なくつては困るから奉公をさせたい、何うか一二年御面倒を御覽なすつて下さいとか何んとか斯ふいふやうなことにして和郎一ッ世話をして吳れないか」吉田屋德「兵衛類りに考へて居りましたが元々宿屋の主人じやアあるし俠氣に富んで居て氣朔だ、宿屋商賣を爲て居ると色々な客が來る、夜るは景氣好く泊つて

も明日の朝に成つて手拭を一本出して　甲「私は講釋師でございます昨夜の勘定が無いからお座敷を願ひたい……」エヘン御免下さいまし夫りや何うも色々な客が來る定めて此御仁達もお困りなさるのだらうと思つたから

德「宜しうございます夫じやア旦那貴郎を町人だといふ事にして貴郎の妹御宜しうございます私しがお世話をいたしませう……お嬢さん御何歳でございます　櫪「お嬢さんなんて困るではないか　君「私しは當年十八歳　德「へエーお十八……柄が大きくつて入つしやるから二十位いに見へます　八「イヤ女は何んだフケて見へる方が好いんだ　德「然ふでございますとも宜しうございます」と氣朔な德兵衛直ぐに大坂屋の若衆の所へ來て此話しをしたから　源「早速あつて有難い、然んなら德兵衛さん私から聞たと云つて先生の所へお連れなさい、其所で德兵衛は自分に一人の娘があるから其者の小

颯波離した着物をお君に貸て……道中の事故別段着物の用意も無かつたと見へる德兵衛お君を連れて城中の塚田の所へ連れて行くことに成つた櫪三八郎はお君に能く賴んで誠の一流軒であるか無いか見届けた上知らせて呉れろといふ、お君も委細承知をして偖て德兵衛に連れられ塚田の道場へ來て二三日目見へ、充分に氣に入つて是なればといふので相談が纏りました、塚田先生といふ人は四十三四、弟子は大勢居るし旁々するから夜るに成ると御酒の御相手床の上下げをして居る、別に六ケ敷いことは無い、五日が七日十日と立つ内にたまには失禮なことだが先生もお酒の上でお君に對して御戯れなさることがある　君「先生御冗談ばかり仰しやいます」と風に柳と受流し毀れた傘同樣させさうでさせない、段々奬勸を窃うと確かに塚田一流軒といふ人に違ひ無い、細かき手紙を認めて德兵衛が來たらば渡さうと待つて

居る、權三郎は折々は德兵衛に賴んでは　權「背尾ば何うだか聞て來て吳れるやうに……」奉公の首尾を聞にやるのでは無い一流軒であるか無いか一流軒でない所へ奉公を爲して置くにも及ばんから德兵衛に往つて貰つた、聞にやるとお君が怨ろにしたゝめた物を德兵衛に渡したから手紙を披いて見ると正に塚田一流軒に違ひ無い、天にも昇る心地をしたが城下へ出ることがあるだらう手曳をして吳れるやうにと又お君の許へ手紙を遣はす、お君も承知をして時を伺つて居ると時なる哉や四月八日釋迦出產の當日、御城下に釋迦町といふのが立つ之へは近鄕から男善善女が群集をして來ます塚田一流軒も當日深編笠を以て面部を包み釋迦町の景況を見物に町へ出た、是を早くもお君から知らしたに由つて書狀を見た權三八郎の兩人御城下に往搆へて居る、深編笠を被つて大小を打込んだ權三、八郎先生は面部を包んで歩か

なけりやア成らんといふ譯でも無いから只通常の身拵をいたして來た、向ふから大道狹しとやつて來たのはお君が知らした身拵角格、權三は大手を廣げて前に突立ち　權「塚田一流軒待て　一「何んだ」被れる所の笠を取つて　權「珍らしや一流軒權三である　一「アッ……」と云つて愕いて柄に手を掛ける八郎は後へに控へて樣子如何にと見てあります兩人互ひに身搆へに及んでアワや火花を散らさんとする、人々は喧嘩だ〳〵といふ城中の若侍皆此釋迦町を見物に來て居りますが是を聞て大いに驚き四方八面から飛んで來る、此樣子を見て八郎　八「這は容易ならぬ事である此所で切つては他の人々も殺さなければ相成らんと刀の下緒を取つて後から一流軒に組附き忽ち縛し、仕舞つて　八「サ役所へ出て、吟味を受けて立派に汝に白狀をさして此者の父野里源作の仇敵を報はんければ相成らん　一「何故あつて吾

に不淨の繩を打つ　八「イヤ〳〵決て不淨の繩は打たん武士の道刀の下緒を以て斯樣に汝が縛した、サ役所へ參つて吟味を受けん」と引立つて參つて爰てお役所へ訴へをいたす、役人は驚きなすつたが是非に及ばず、兩人の事を段々尋ねると兩人に於ては今迄ありし次第、立花の家來なることを物語りをする　役「何は兎もあれ片言を聞て塚田一流軒の首を切らせるといふことも出來ん當方も取調べの上君に言上の上篤と沙汰に及ぶ先づ夫迄は止宿いたして居る吉田屋德兵衛方へ預け申附ける」と吉田屋德兵衛を呼出だして權三八郎を御引渡しに成つた、德兵衛承知いたして預かつて歸る、偖て御役方が鐵山を段々調べて見ると鐵山といふ男は前席前々席にも委しく述べた通り惡才の長けたる奴なるに由つて殿樣にも取入つて居る、若侍にも旨く取込んで居る且はなか〳〵に辯口の好い奴であるから家中二十人と尊敬なさ

れて居ました、大奸は忠に似たりとは此事　役人「今日狼藉をいたした二人の侍は立花の家來だとあるが左樣か　二「那れは立花の臣ではござらん大坂の殘黨でございます疾と御取調べに成りますれば右の儀を白狀いたすでござらう　役「ホヽー大坂の殘黨であるか、憎い奴、然しながら立花の家來と云つて見ると表向き是を打つて仕舞う理由にも行かんから宿に預けてあること故明日なり明後日なり役所へ御用があるからと云つて呼出だし途中にて武士大勢にて兩人の者を切つてしまへ、牢へ入れて兎角ふいたしては能くないから途中にて切てつ仕舞うが好い、死人に口無し、死んで仕舞へば跡は何うでも成るから……　二「委細承知いたしました」とあつて三十餘人の武士が仕度をいたして翌日を待構へる、神ならぬ身の權三八郎は夢にも知らず吉田屋德兵衛方へ明日役所へ出頭いたせといふ差紙が着たから彌々鐵山

が白狀いたしたに由つて呼出しが來たのだらうと翌日仕度をいたして悅んで役所を差て來る途中に於て大勢の若侍物をも云はず出合喧嘩といふものを始めました、何れも是れ恨みがあつてするの何んのといふ理由では無い、萬一鐵山の事でも口走つて夫を證據にされては跡々で越後家に障ることでもあつては成らんと思ふから其故途中で下らぬことから出逢喧嘩、忽ち双方拔劍に及んで八方四面に切倒す、遂々城中の若侍の方は五人切殺されて七名の手負を生じました、去れど寡は衆に敵し難く權三八郎は大勢の爲に取押へられ既に一同の爲に嬲り殺しにされんとする時其所へお出でなさいましたのは越後家の御老職、通行なすつて是を止め何は兎もあれ死人は夫れ〳〵取片附けさせ手負には手當をなし、二人を引いて立歸られました、此所へ老職が來なかつたら二人は切られて此お話しも是で御仕舞に成りますけ

れども此所が天の惠み、老職が段々調べて見ると是れ〳〵云々だと云ふ、喫驚いたして直ちに殿樣に御逢なすつて片手落の御裁判を諫め、一應兩人の身元を取調べてから兎角ふの御判きあつて然るべし」と言上に及んだ、偖てお君は一流軒の家に居つて樣子如何にと相待つ内此有樣でございますから喫驚いたして吉田屋へ戻つて來て主人の德兵衛に今迄の話しを委しくいたし且つ細々と認めた一本の書狀を渡し是を筑後柳川の老職轟木重兵衛方へ送つて吳れろとの事故德兵衛も承知いたして、吉田屋から立飛脚を以て筑後柳川の轟木重兵衛樣の許へ書面を送りました、重兵衛お君の書面を見て大いに驚き且つ怒り、相憎殿樣は江戸表であり升るから御自分直ぐに仕度に及んで柳川を出立に及び、急ぎ江戸へ立寄つて殿に此事を言上をいたし殿樣もお怒り遊ばして　殿「其方君命を恥かしめざるやう此使者を相勤めろ」

といふ重兵衛委細承知の上江戸を立つて越後の國高田に乘込み、越後家大廣間に於て大議論を吐て殿樣を屈服せしめ塚田一流軒を貰ひ受けて櫨三に仇討を遂げさせるといふ三勇士互ひに義と勇とを現はすの一談、後席のお樂みといたし升……

○第十九席

轟木重兵衛越後の宰相を訪ク
奸士其の非を悟り罪を縷述ス

エ、越前の國足羽郡福井城より越後國へ御國替に成つた越前宰相忠政公、當時高田の城に在して人皆越後樣と尊敬をいたし堂々たる德川家の御連枝でありまする、前回言上をいたしました通り塚田一流軒といふ男ば此越後家に仕へて殿樣に對して頻りに取入つて居る、其が爲に殿は二無き者と思召して入つしやる、然らば此度の儀も御自分が御贔負に遊ばす一流軒が

彼は大坂殘黨でござると申上げたのを深く信じて既に櫨三八郎は危き場合に立至りましたが僅かに御老職御通行に其難を免れ段々調べて見ると何うも鐵山といふ男の方が惡人らしいから殿に御諫言申上げて漸くに納得をおさせ申して一流軒を取押へ老職が預かつた、櫨三八郎の兩人も老職が預かつて一應立花家へ紹介をいたして見んといふので使者を立てました、此老職とは何人か、即ち越後家にて名の高い大隈帶刀と仰しやるお方、然る所が此御書面の來る前にお君の許から重兵衛へ對して書面が來たから重兵衛はお君といふ婦人は知らないが中を開いて見ると關口八郎と野里櫨三の兩人は城中へお取押へに成つて死刑に行なはれまずることや如何なることか定かならん何卒一日も早く御出で下し置かれ右御兩所の命を御助け下さるやうにと委しき文通、其所で重兵衛は仰天して江戸詰の殿樣と御相談の上轟木

重兵衛取急いで高田の城中へ乗込んで來たのでございまする、登城をいたして立花左近將監家來老職蘿木重兵衛罷り出でましてござる御目通り仰せ付けられたい」と申込んだ、立花家では使者を立つたから夫で來たものと思はれた、此りや無理で無い、隨分迎ひの使者をやつて其使者よりも先へ當人が來る、其が爲に使者が腹を切つた抔といふ白痴〳〵しいことがございます、是に由つて越後家に於ては立花名代の老職蘿木傳右衛門の悴蘿木重兵衛、戰場生殘りの豪傑、叮重なる御扱ひをして早速召出だされました、大廣間に召出だされた、重兵衛謹んで罷り出てると正面には宰相忠政公、左右には老職重臣綺羅星の如くに居並んで居りまする重兵衛殿は御前に進み、頭を下げて居りましたが　殿「アイヤ立花家の老臣蘿木重兵衛とやら近う〳〵　重「ハア恐れ入り升、偖て餘の儀には候はねど此度罷り出で候は

餘の儀にあらず主命に由つて拙者罷り越したるは御當家に於て御取押へに相成り居り候所の野里櫪三、關口八郎の身の上にて候、彼櫪三八郎は全く立花の臣下に相違無之く櫪三は親に對して孝行君に對しては忠義の武士、又八郎は右櫪三に對して一臂を添へる忠勇義膽の武士、右兩人を頂戴いたしたく拙者態々遠路を罷り越しましてござる、御引渡し下し置かれゝば有難いことにございます　殿「ウム重兵衛其方の申條一應道理に存ずるが然し大坂の殘黨であるといふことを塚田一流軒鐵山が申出だしてあるに據つて大坂の殘黨と心得て取押へてある、然るに其方相渡しくれと申しても直樣相渡す理由には參らん、一應取調べて後引渡して遣はさうと存ずる間だ左樣心得ろ亦取調べたる上全く大坂の殘黨にあらずとするも塚田一流軒鐵山と云へる者は予が秘藏にいたす家來、彼は至つて忠義の者だ、其者の一命を絶、

んといたしたる櫓三八郎、譬へ大坂の殘黨にあらずと雖も相當の罪科を申付ければ成らざる者、由つて相當の罪科申付けての上其方に引渡すから左樣心得ろ」聞くより重兵衛大眼を見開いて　重「殿の御言葉には候得共拙者は憚りながら若殿飛彈守の先手を相勤め大坂以來諸々の軍に出陣なし斯の如く鐵砲矢傷身体に七ケ所あり、且拙者の父難木傳右衛門なる者は朝鮮關ケ原に勇名を轟したる者、何迚左樣なる一言を以て退くべきや、塚田一流軒は佞人惡黨の曲者にして彼が小倉以來の所業卑怯と云はんか賤劣と申さうか言語を以ては盡し難し、諸々惡業の末五尺の身体置き所無きまゝに御當地へ來つて殿に仕へ辨舌を以て殿を迷はしむる曲者、恐れながら君は愚人の舌に迷ふて忠義の者を失はんと爲し玉ふなり、上高くして下を知らずとあるが餘りと云へば片腹痛し、ソレ大奸は忠に似たりとは古人の金言、試みに猫

を召し候へ始めは庭先きに頭を垂る、君魚を賜へば椽に登つて是を喰ふ、喰へば椽を進んで闕を越し、疊の上にて樣子を伺ひ、亦進んで膝に近づき、膝に昇り、遂に是に眠り、隙を伺ひ膳部の嘉肴を盜む、一流軒は其行ひ猫に似たり始めは如何にも殊勝の如くなれど心中必ず一物あらん、君是を見るの明無くんば何を以てか明君と云はん、何卒左樣なことを仰せられず兩人を私しに御引渡し下されたく存じ候」殿はカツと怒り玉ひ　殿「默り居らう重兵衛倍身者の身を以て小癪なることを申する奴かな、無禮者奴誰かある重兵衛を引下げて相當の沙汰に及べ」御近侍衆は鶴の一ト聲バラ〳〵と立んとするのを老臣大隈帶刀、伊豫田左膳の兩人　甲「アイヤ各々暫く〳〵……如何にも重兵衛殿の御言葉御道理に辨へる、君は只だ〳〵塚田一流軒の言葉を御信じ遊ばして彼を忠義の者と思召てあらせられる、が能く〳〵吟味いた

さんければ相成らんことでござるから善惡は尋れた上のこと、何卒暫く御扣への上御休息の程願はしう存じまする　重「如何にも重臣の御仲裁故暫く相控へるでござらう、お言葉に由つては重兵衛此場は去りません君耻かしめらるゝ時は臣死すと申す、左樣ござらば暫時休息いたすでござらう御案内を下されヨ」と流石は天正の大豪傑蘇木傳右衛門の悴重兵衛、斯く大言を吐て御前を退がる、爰で老職達に於ては　甲「如何にも重兵衛の言葉は道理だが然し全く一流軒が源作といふ權三の父を切つたので、兩人は仇討に來たのか分らんが全く然ふであつて見れば兩人を咎める所は無い、萬一兩人を切るやうな事があつては、越後家には目の明た家來が無いやうで諸家へ對しての物笑ひに成る一流軒を嚴しく吟味いたして見ん」とあつて早速一流軒を召出だして御老臣方が嚴しく吟味に及んだ、何爲ろ今君の御覺へ目出度き一

流軒、吟味をすると云つた所が裸体にして打つ尻を打つといふことは出來ませんけれども段々御說諭をなさる　帶刀「殿の御耻辱に相成ると成ならざるとは汝一人の心にあり速かに實を謂れるやうに……」と說諭を蒙つて暫く沈默して居つたが大体塚田一流軒といふ男は惡物には違ひ無いが御恩を蒙つた伊豫守忠政公　一「越後家の面目を汚すやうな事があつては實に濟ざる理由」性は元善なり恩に報ゆるの刄は無いから屹度思案をいたしまして　一「然らば有体に申上げます何を隱さう私しに於ては彼の野里權三といふ者と立會をいたして打負け、其後豐前小倉に於て又彼に打負け、如何にも殘念といふ心から彼を殺す氣に成りまして寢首を掻んとした所亦不覺を取り、夫より彼を尾けつ廻しついたしたが討つこと能はず、遂に子への怨みと親を切つて舞さんと柳川の城下へ這入り五人の惡漢を語らつて親の野里源作を討つた

に相違ござらん、誠に恐れ入りました、大坂の殘黨抔と申せしは全く彼を亡き者にせんといふ拙者の惡巧み、御老職方に御苦勞を相掛け候段重々恐れ入り奉りまする宜しく御取斗ひの儀を順ひたい」と服罪に及んだ、老職方に於ても御感心を遊ばして直樣伊豫守忠政公へ言上をいたすと「殿ア、左樣か當人が白狀して全く櫨三の父を殺したりとあれば何うも是は引渡すより詮無いことだ、然らば老職共取斗ひを以て立花の家へ重兵衛態〻罷り越したるに由つて櫨三八郎にも手當をいたし一流軒鐵山と三名重兵衛に引渡して好からう」と斯く御前から御言葉が下つたに由つて老臣大隈帶刀伊豫田左膳の兩名改めて重兵衛に逢ひ　老臣「誠にハヤ吾々の不行屆き、立花公へ對して面目次第も無い、如何に君のお言葉があればとて櫨三八郎を取押へ置くは甚だ宜しからざることであるが罪の疑しきは是を罰せず

何も別に刑に行つた次第ではない、又牢舍の苦しみを爲したといふ次第でも無し、一旦繩には掛けたやうなものゝ手當をいたして置たのであるから此段何うか惡からず、一流軒鐵山に於ては仰せの通り櫨三の父源作を討つたに違ひ無いと有体に白狀いたしたに由つて速かに御引渡し申上げるから宜しく御征敗を願ひたい」重兵衛莞爾と笑ひ　重「夫れは〳〵辱け無い、櫨三八郎、又鐵山を御引渡し下さる上からは何を彼是れ申上げんや、有難き仕合せ決て御當家の御迷惑に成るやうなことは取斗らはん、心得でござる」老職も安心かして偖て櫨三八郎を引出だし重兵衛に引渡した

○第二十席

櫨三と關口と兩人は別に今日まで牢へ入れられて居たといふでも無い充分の

櫨三遂に俱不戴天の仇を報ず
關口八郎立花家の臣下に列す

御手當に預かつて居たこと故格別衰もしない兩人久々にて重兵衛殿に面會をいたし一流軒をも頂戴に及んで爰に城中を退かり、一旦重兵衛の宿へ戻つて一流軒は籠にて送ることになつた別に青網が掛るといふ次第でもない青網を掛けて國へ送るのは好いけれども罪人を切つたと云はれては櫻三の刀の汚れ又充分の仇討ちにも成らんといふ所から普通の駕籠を雇つて是に載せまして三人は其跡に從ひ越後の高田を發足に及んで段々と日を經て筑後の柳川へ立戻り、立花左近將監、同飛彈守御親子に御目通りをいたした時に殿様が　左近「重兵衛長の旅をば申付け太儀に存ずる、又櫻三八郎も今日迄の困苦察するに餘りあり、就ては重兵衛其一流軒とやらん申す者は源作の仇、櫻三をして仇討を立派にさせるやうに　重畏りましてございます」此所で御城下はづれ平野といふ所で仇討といふ事に相成つたから當日に成ると聞傳

へて是を見物をせんといふので實に平野は群集いたしました、關口八郎は助見をいたすといふことに成つて矢來こそ築かないが御足輕は六尺棒を以て遠卷に警衛なし、一流軒にも充分仕度をさせ、櫻三も仕度を遂げて爰に互ひに立合をいたした、仇討の手拔といふ者は大抵似寄つて居りますから是を略します儕て双方立上がるや一流軒も一生懸命ではあるが何とて邪は正に勝ちませう、櫻三の爲に切伏せられ、芽出度仇討相濟んで何事も無く爰で八郎へは上から仰せがあつて御身に於ては天晴れなる所の助太刀をいたし櫻三に本懐を遂げさせ吳れたるに由つて益々其義勇の程嘉しく改めて當家に隨身いたして貰いたい」八郎先生勢ひ止を得ず立花公の御家來に成らなければ不可んことに成りました　八「恐れ入りましたことだが手前は南部公の臣にして佞人の讒に由つてあられも無い疑りを受けて浪人はいたしたが折があ

らば南部へ歸參を致したいと心得て居りました」殿は聞召して　殿「去らば汝妻を娶つて兩人の子が出來たらば一人の子を南部の臣にいたせ、其内予が南部に面會をいたしたれば能く話して置くから予に隨身いたせ」といふ

八「有難き仕合せ、數ならぬ私斯迄に仰せ下さるは冥賀至極、謹んでお受をいたし升」と爰に八郎は立花家の臣下と極つた、今迄は客分、重兵衛が

重「樋三氏先つ頃拙者の所へ文通をいたしたるお君と申す婦人、城下の旅宿に居つて態々文通をいたして呉れたに由つて手前高田へ參り各々方を連れて參つたのだが然らば彼は御身等の爲には大恩人、彼の女は如何いたされたや

樋「御意にございます那れにて申上げ奉りまするのも甚だ何うも可笑うございますから申上げませんでしたが未だに吉田屋德兵衛の家に待つて居りませう

重「夫りやア不可ん行屆かざることであつた、高田を出立の

際聞うと存じて居つてサヨロリ忘れて仕舞つた、然し無事に此方へ戻つた事は知つて居るから安心を爲て吉田屋とやらに待つて居らうから早速迎ひに遣はさう」と爰で改めて家來を二人越後高田の吉田屋へお君を迎ひに遣はした間も無くお君を連れて柳川へ戻つて來る、此者と關口八郎先生と夫婦に成つて金烏玉兎の足なみ早く三年の月日を經ました、此三年の間だに天草の騷亂が起つたので立花侯も將軍家の御下知に由つて天草一揆を征伐して大功を立てた、此の勇士も天草へ渡つて飛彈守に從つて大功を立てたが是は天草講談の内に委しく出て居りますから略して置て後回に本篇に關係のある所だけを少々演じます却説八郎は一人の男子を擧げて其悦びは譬ふるに者無し、樋三重兵衛も共に悦び三勇士氣を揃へて君に忠義を盡して居つた、去れば先づ此お話しは一段落を告げたやうなものでございい升、爰に柳川の在に松岡村と

いふ所がある、此松岡村に一ッの騒動の起つたといふのは元肥前の國長崎の醫者で松浦玄岱といふ人があるる、其松浦玄岱といふ人は右大臣信長公の御繁盛の時分に南蠻國からフーラバテレン。イルマンバテレン。キヤソクソイルマン。ヤソヰズイルマン右四人が日本へ來つて信長公へ謁して南蠻寺といふ者が出來た位ゐだ、所が其後何か日本の國に宜しく無いことを爲たといふので南蠻寺に居た外人と皆日本國拂ひを命ぜられて仕舞ひました其時に松浦玄岱といふ醫者は年若であつたが右四人の者に就て何か不可思議の事を敎へられたので後松浦玄岱といふ人が長崎の在々を歩いて多くの病人を直して歩いたが實に名醫だ、何うも病人の直るの直らないのと云つて何んな病人でも松浦玄岱に掛つて玄岱が療治をすれば直る、盲目が眼が明た、聾りが歩き出した、死んだ者が蘇生爲たといふ騒ぎ、肥前一ケ國の

評判と成つて松浦玄岱の家は毎日市をなす位ゐ、忽ちの内に巨萬の富をなして弟子も多くあり行ひ澄して居りましたが七十有餘歳に成つて此人取押へに成つた是れ全く人の眼を暗まして不思議なることをいたしたものと相見へます、其後天草一揆が起つたのでげして（天草の大將分に森宗意軒といふ人があります、其森宗意軒といふ人は右松浦玄岱であつたといふやうな事を申す者がありますが桃李は保證は出來ません）右の松浦の弟子が殘つて居て矢張り不思議なことをして人の目を暗まし色々なことをして錢を集める中にも蜂須賀玄蕃といふ者は最も其術に長じ五年腰の拔けて居た病人の腰が立つて歩き出した、何所のお爺さんは全て目が見へなかつたのが目が見へるやうに成つた、啞が口を利くやうに成つたといふので次第〳〵と人が集つて來てお百姓さん方が大勢集り隨分騒がしいことがある、夫を立花公

の郡奉行吉田喜左衛門といふ方が聞て　喜『何うも多くの人を集めるといふのは可笑い醫者が如何に上手だからと云つて啞が口を利たり盲目が眼を明て躄が駈出す筈も無い、實以て不思儀なことである』と郡奉行は職掌であるから下役を遣はして段々をかしなことがあるのでは無いかと樣子を見届ける、何うも一寸見た所では分らない、内に段々〳〵と人が多く集つて只今のことに爲て見れば五百人八百人と集つて宴會を開くやうな形ち、其頃の事故無雜作なもので手造りの酒を持つて往つて山で飲み色々の相談をいたす時としては天草の戰さの時には名主の息子さんは戰さに出て强かつたの、乃公の親類は誰方樣に從つて討死を爲たつけ抔といふ言葉がチヨイ〳〵出る、郡奉行の下役右の由を奉行に言上をいたすと　喜『夫は容易ならざることと嫩の内に刈らずんば斧を用ゆるの憂へあり近くば天草の一揆五人か六人の

浪人より事を爲して一万有餘の大軍と成り原の孤城に集つて年越の籠城をして御名代が御死になさる、去れば彼等如何なることをなすやも斗り難し萬一の事あつては寺澤松浦兩家が天草の爲に上の御咎めを蒙つたるが如く立花家も如何なることに成行くやも斗り難し、何うか早く取押へたいと、重兵衛公に言上をいたすと　重『困つたもんだ、醫者が醫術に長じて人が夫が爲に集つて居るんだから是と云つて罪を申附ける廉が無い其理由無くして民を召捕らば國の政事が亂れる、是りやア斯ふ爲やう仕方が無いに由つて多數の兵を集めて鐵砲を持たせ調練をするやうに見せて其集つて居る所へ突然に押寄せたら百姓達は自分等を責めに來たのかと思ひて皆驚いて逃げるだらう、然して其長立つる者を捕へて上で思召有之候に付き當分領内へ置くことは相成らんと追ッ拂つて仕舞をう』昔しは大

名は疑しき者は領分へお置きなさらない、當今の豫戒令と云つたやうな勘定、夫が宜からう然らばといふことに成つて重兵衛八郎樾三先立ちに成つて其手配りをいたして立花飛彈守馬上にて御乘掛けといふので二三百人の人數ワイ〳〵と云つて例の百姓が大勢集つて居る所へ鐵砲を十挺筒口を揃へて向つて來た、集つて居る奴等ア喫驚して　甲「ヒヤア何んだ〳〵　乙「殿樣が私等ア征めに來たゞんべい次第に由ると鐵砲で討たれるかも知れれへ、切られるかも知んれへ」中に少し理屈の分る奴は　丁「無暗に乃公ッ達を殺したり何んかは爲めへけれども天草の殘黨とでも思つて御領主樣が征めに來たんだ　一同「エヽ夫りやア大變だ、療治を爲て貰つて病氣が直つた所で命を全事取られた日にやア大變だから逃げちまへ」ワイ〳〵と逃げ出した、跡に殘つたのは蜂須賀玄齋、重兵衛は右玄齋を取押へてスッカリ吟味をなすつたが是といふ怪しい點も無い、當人が夫だけの術を心得て居るのだから他所から見たら妙なことがあつたんでせう」其所で是といふ證據が無いから思召有之に就て當領内へ差置くことは相成らんとヲッ拂われる、其後何事も無くあつたるが或時立花飛彈守御近侍を五人御召連れに成つて十一月下旬のこと、枯野を見やうといふので程遠からぬ山へ成らせられ御酒宴を遊ばして居る所へ思ひも寄らづ長刀を帶した浪人体の者以上七人飛彈守に對して切つて掛る、是れ如何なるものか次席……

○第二十一席

立花侯刺客の爲危急身に迫る
三勇士馬を走せて之を救ふ

此七人の侍の身拵たるや袴の股立ち高く襷を掛けて草鞋穿き、各々長やかなる劔を引拔て物をも云わず飛彈守樣へ切つて掛る、周圍には御近侍が五人

小者が五人、以上主從十一人、思ひも寄らぬ狼藉に　一同「アッ……」

といふと御近侍達に於ては　甲「何者なれば斯樣な亂暴をいたす當國の若殿立花飛彈守に渡らせられる何故に汝等は斯樣な亂暴狼藉をいたすか　曲者」

吾は立花飛彈守殿に怨みあり、飛彈守の御一命を頂戴せんイザ覺悟召されヨ」

と背丈けの勝れた侍は飛彈守に切つて掛る、他の者共は皆御近侍に對して切つて掛りました御近侍は必死と成つて是を防ぐ、飛彈守に於てもお馬を煽り立つて刄の下を拔けつ潛りつ何爲ろ戰場萬馬を往來した若大將でありまするからお刀を御引拔き遊ばして渡り合ひ、御近侍の者は血塗れに成つて若殿にお怪家があつては成らんと戰つて居た、先方の曲者は益々氣を得て切込んで來るから遂に御近侍二人は切倒されて三人は血塗れ、ハヤ若殿の御命は風前の燈火の如く危險いふはかりも無い、斯る所へ遙か向ふから　○「ハ

ー……」と馬を煽り立つて乘込み來つたるは三人の武士、一人は槍を小脇に搔込み、一人は刀を持ち、モー一人も刀を拔て都合三名馬を煽り立つて乘込み來つたるに由つて敵なるか味方なるかと飛彈守に於ても一心不亂に切合ひながらも向ふを見てあれば一番先へ刀を拔て來るのが鼎水重兵衛、其次に槍を搔込んで來るのが野里樞三、跡のが關口八郎の三勇士でございます、何んで此所へ來たのだといふと時しも十一月下旬、紅葉を見やうと鼎水重兵衛樣の御屋敷へ樞三八郎の兩人が罷り出で、御酒を飲みながら四方山の話をして爲て居りました、然る所へお庭へ駈込んで來た一人の小者　家來「申上ます　重「何んだ　家來「只今若殿樣枯野御見物の爲山中にて御酒宴の所へ不意に七人の侍が暴れ込まして若殿樣が危い御樞子で……ゴ……ございますから早くお出で下さいませんければ御一大事でございます

重「然ふか……」といふと重兵衛は盃を投棄て馬の用意をさせ袴の股立ちを取り各々得物を取るや否や馬に打跨がつて眞一文字に來つて見れば七人の曲者は血塗れに成つて戰つて居る、近侍三人は切倒され二人は血塗れ飛彈守樣はアワヤ危く見へさせ給ふ重兵衛は一刀を振翳して　重「曲者我君に對して慮外至極……」といふより早く切込んで一人を袈裟掛けに切つて落す、權三は切附けて來る一人を　權「エイ……」といふと胴中へ風穴を明けて仕舞つた、八郎は若殿の後へ廻らんと爲た奴を是亦肩先から乳の下掛けて切下した、斯る有樣にて忽ち六人の者を切棄てました、先の程から飛彈守樣のみを覘つて居つた大の男は此体を見て　男「這は叶わじ」と逃出だすを眞一文字に追駈けて來て今や太刀を振上げ切下さうとしたが其所は三人の內如何程か年を取つて居る人だ、役向は老職を勤むる程の重兵衛でございますから　重「イヤ待て暫時、今此癖者を切つて仕舞へば何ういふ理由で若殿を切らふとしたか善惡を調べることが出來ないと早くも心の內に思つたに由つて峰を返して罷て肩口をビシーリ、アッと叫んで打倒れる奴を踏り掛つて突然刀劔をもぎ取り小手を返して戒める　曲者「武士の情けでござるから命を御取り下さい　重「默れ、武士の情けだから命を取れ、取つて好ければ善い時に取つてやる、吾等と一緒に來たれ」處へ權三八郎の二人も來て其者の帶を取つて是を縛り　重「サ先づ若殿に於ては御尊体に恙無く欣慶至極に存じまする　飛彈「既に危き所へ汝等三名馳付け呉れたるに由つて予は無事である、三名の忠義忘れは置かん、予が命の親は其方三人であるぞ　三人「ハヽア恐れ入り升　重「就ては斯る所に長居は恐れ、イザ去らば御歸館あつて然るべし」五人の小者はチリ〳〵に成つて逃出し山の陰で皆ブル〳〵震へ

て居る八郎是等を呼出して二人の者に手當をさせ、猶一方は城中へ此趣きを知らせた、是を聞て城中上を下へといふ騒動、追々に此所へ乘込んで若殿に恙きを祝し三人の死者も夫れ〳〵取片附け、二人の近侍も勞つて皆城中へ引揚げました、三勇士は彼の浪人体の者を守護して奉行所に至り、偖て何故に斯る狼藉をいたしたか、又何んの怨みがあるかといふ事を段々に御吟味に成りましたが此武士濃んだとも潰れたとも白狀を爲ない、重兵衛もほと〳〵持餘して自身御調べに成つて見たが　侍「誰方が御調べに成つても手前は如何樣な御吟味を受けても白狀を仕らん」と更に白狀をいたしません、皆一同大きに困つて仕舞つて殺して仕舞うのは雜作はないが何んな怨みがあつて飛彈守樣へ狼藉に及んだのか夫が分らぬ内は殺す理由には不可ん、左近將監樣に於ても御憤り遊ばして　殿「憎い奴であるワイ背中を斷割

り熱鉛を注込むとも白狀させろ」と仰しやる、去れば猶更に脅迫つすかしつ爲て問ふて見る　重「然らば其方の生所姓名を申せ　侍「白狀をいたさんと申したら姓名を名乘るには及ばぬ話し、若殿飛彈守に怨みがあつて切付けたに相違ございませんから如何やうな罪科を蒙むるとも宜しい、決て上を怨まない、罪科仰せ付けられたい、斯ふいふ理由と言上いたす理由には相成らんから宜しく御征敗に預りたい」と云つて居る、其言葉の節々を聞くに何うも奥州の言葉使ひであるから偖ては奥州筋の者に相違無い、奥州筋で那の位ゐ劍術が出來る者なら定めし名のある者だらう、人に見せて知る者も無きに非ずと夫からといふ者は柳川の城下へ奥州の方から修業者が來るとは見て貰う、斯ふ爲たらば誰か知つて居る者があらう、知つて居る者があれば姓名も知れると來る人毎に見せるが知つて居る者が無い、或時又岩代邊の武

術修業者で御城下へ來つて宿を取つて居りました、此人なか〳〵の大天狗、天下に槍を持たしては先づ乃公だらうといふやうな顔を爲て　侍「コレ〳〵亭主〳〵」　亭「ヘイ　侍「何うだい柳川なんてへ所は猫の額を髣髴な所だが是でも武藝の出來る人は居るのか」宿屋の亭主ムツと爲たれ　亭「何を生意氣なことを云やアがる」と思つて　亭「ヘヽヽヽ旦那樣貴郎は御見受け申せば槍の先生らしうございますが先づ槍では日本國中に此柳川位ゐ名人の多い所はございますまい外の國の槍を使ふ人達は眞實の槍使ひでは無は那れは蜻蛉を差す稽古をするんだ、自分の土地を最貢にする理由じやアございませんが先づ槍を以て一といふ方は柳川にお出でなさるでせう　侍「ナニ亭主柳川を除く他の國の槍使ひは眞實の槍使ひではない　亭「ヘイ先づ然ふでございませうと思うんで　侍「ウム然らば當城下には何んといふ名人が居る　亭「先づ第一には野里權三先生……人呼んで槍の權三と云ひます　侍「ホヽー乘て槍の權三といふことは耳にして居つたが當城下に居るか　亭「ヘイ立花樣の御家來でげす　侍「夫から何んといふんだ　亭「寶藏院　侍「虛言を吐け此の野郎、寶藏院　先生は南都の方でモー三十年も前に死んで仕舞つた　亭「イヱ豫間違ひました、上泉伊勢守秀綱　侍「白痴野郎伊勢守は劔術で上州伊勢崎の方で八十年ばかり前に御亡くなんなすつた　亭「夫りやア虛言でございます、全くは槍では野里權三先生、劔道柔術では關口八郎先生に蘚木重兵衛樣、今立花の三勇士と人に云はれて居ります、旦那も一ツ權三先生と御立會を願つて天狗の鼻を挫いて貰つちやア如何でゲスへ　侍「已れ無禮なことばかりいふ奴だ、然らば明日は其槍の權三の家へ參つて立會つて見やうが拙者が勝つたら貴樣如何いたす　亭「左樣

でございますれ何うも宿屋の亭主でゲスから金打をするの何んのてへ次第には參りませんが如何です貴郎が櫨三先生にお勝ちなすつたらばモー今日で五日ばかりの御滯在、五日の宿泊賃と御酒代色々のお立替を墨くろ〳〵と棒を引うではございませんか、貴郎を只お泊め申しませう　侍「成程此りやア面白い　亭「其所で貴郎が負けたら如何なさる　侍「乃公は負ける氣支ひは無い　亭「マア負けたら何を下さいます　侍「マア負ける氣支ひは無いといふに　亭「夫でもマア負けたら……　侍「五月蠅い奴だ拙者が負けたら此首をやる　亭「夫りやア お斷り申しませう貴郎の首を貰つてからが埋るのに入費が掛ります、鰻の頭なら猫が悦び芋の頭なら酉の市の賣物に成りますが人間の頭抔ア貰つて迷惑をいたします、刀が一本慾いんですが貴郎の小刀を下さいませんか　侍「ヨシ遣らう　亭「じやア明日は私しが櫨三先生の所

へ御案内を申しませう　侍「ア、左樣か夫は氣の毒なことだ　亭「何爲ろ只では無い刀一本の商法ですから……　侍「モー負ける氣で居やアがる、詮方の無い奴だ偖て翌日に相成ると大松屋平六といふ宿の主人、例の侍を連れて櫨三先生のお長屋へやつて來て　平「旦那此方ア私共へお泊んなすつた槍の先生でゲスが是非先生と一本お立會が爲たいと仰しやる、一本御立會なすつちやア下さいませんか　櫨「ア、夫は〳〵……お武家始めて御目に掛ります　手前野里櫨三と申す未熟者、何分共に……好うお導れ下さいました　育つ程土に手が突く柳かな　譏でも何んでも出來て仕舞へば人に對して天狗抔は云はないもの慾いな腕前の奴が一番傲慢な者であり升る、只今のお役人でも然ふでチヨイと區役所へ呼出されても然ふでゲス月給を澤山取る方は人民に對しても丁寧であり升が受付け抔の者が一番威張つて吾々を叱り飛ば

す、餘事に渡つて恐れ入り升彼の修業者も己れの生國姓名を明かし其所で立會を致しましたが三本勝負で修業者が二本の負け、詰り權三先生の勝ちでございます、只舌を卷て己れの未熟なのを赤面に及ぶ、宿屋の主人平六は小刀が貰へると大悦び此時權三は　權「偖て甚だ失禮ながら爰に一ッのお願ひがある、實は斯樣〳〵の者を取押へてあるが餘程の腕前、生國姓名を何うしても明さんが其言葉の節々は奥州訛り、貴郎も御生國は奥州とあれば萬一彼を御存じでは無きか爲渡見て頂きたい　侍「宜しい委細承知いたしました、知つて居ります者なら敎へて上げませう」と其人調べ所へ對して彼の涙人を引出だした時に此方のお障子の陰から密と見て居つた重兵衛殿は　重「何うだい彼の者はお分りに成つたかい　侍「ハイ分りました、那れは奥州忍郡福島の城主板倉内膳正重正殿の御家來御老職の内でも歴然

と致したる福富太郎作といふ方の子息福富晋作といふ人でござる、那の方は劍術も能く出來、槍も能くなさるし、父太郎作といふ人は内膳正重正樣の御供をいたして天草の役に拔掛けを爲まして元日の御討死をなすつた大忠臣の悴でございます　重「アヽー左樣でござるか　侍「何んで御當家に對して左樣なことをなされたか福富晋作といふ方に相違ございません　重「實に辱けない」其仁に對しては充分の饗應を致して置て薄木重兵衛は小野但馬、戸崎和泉を始めとして其所へ出て彼の涙人に向ひ　重「アイヤ御涙士御身は陳ぢ偽るとも御身の姓名主名も相分つた　侍「エヽ……　重「御身は板倉内膳正重正殿の家來、當時野州烏山へ御國替に成つた板倉内膳正重信殿の御家來にして前内膳正重正の大忠臣にして福富太郎作の一子同姓晋作といふ御仁だらう　侍「アッ」と云つて顏の色が變

る　晋作「御明察の段恐れ入り奉ります　重「姓名相分つたる上からは偽り玉ふには及ぶまい有体に申し出だしたら宜しからう　晋「斯く成る上は是非に及ばんから言上を致します、手前は主人内膳正重信の側に於て大酒をいたし主人が側近く召使ひまする女中共た戯れごとをいたして御怒りを受け烏山なば追放仰せ付けられて涙々の身と相成り諸國を歩き、人には白痴な奴太郎作の悴福富晋作と云はれて由緒正しき者で不都合のことをいたす御前にて大酒をなし女に戯れて永の御暇、追放仰せ付けられるは如何なる事やと家中末々に至る迄拙者の事を笑はぬ者もござらぬ、斯様申上げますると何か拙者が申譯をいたすやうではあり升るか其實拙者は君へ對して不忠をいたさうといふ所存は毛頭無いが私の父福富太郎作討死をいたし升る其時に拙者に認めて送りました手紙、拙者披いて見れば此度江戸表より二度

目御名代松平伊豆守様御下向に相成るに就て主人内膳正重正侯討死の御覺悟を遊ばし九州大名一統の方々に御相談を申上げたる所憚りながら御當家若大將飛彈守様左近將監御名代として御出席あり我主人に向つて仰せあるには己れが討死をするに人々に御相談は要らざること、御討死は御勝手次第吾々の知る所で無しと櫛もほろゝの御挨拶、主人内膳正赤面に及び其儘御退席明元日彌々拔掛けの討死をいたす御決心、吾等も御供いたして主の馬前に斃るゝ覺悟、然し飛彈守の一言に吾等に至る迄無念骨髓に徹せり汝も主の無念を察せば存命へて此怨みを報ひ呉れろ草葉の陰にて飛彈守の頭を打つを樂しみ居らんといふ最と口惜氣なる父の手紙に候、拙者も此書面を讀みハラ〳〵と無念の落涙に及びましたが果して主人や父は討死御戰さ相濟んで主人主水正は閉門、必ず家は改易に成り家中はチリ

〳〵バラ〳〵に成らんかと心得居り候 所 上に於ても御慈悲の思召し且は仙臺中 將の御取爲しに依つて主水正は福島より烏山へ御國替御任官御允許に成つて内膳正重信、家中はホツと一ト息板倉家萬々歳を祝する中に拙者は獨醫々として樂ます、君に忠義を盡して居れば武士の道は立つ事と云へ父の密書に對しても只ヲメ〳〵とは存命へられず、御當家飛彈守殿に對して一ト太刀なりとも怨みたしと明暮れ心掛け居りました……とは云へ萬ケ一仕損ぢたる時は再び主家に禍ひの及ぼさん事を恐れて心にも無い側女に對して滝猥事を仕掛け、御勘氣を受けて江戸國兩樣の家中に畜生武士と噂さをされ、遂には追放の身と成る有難く心得て故郷を立去り、昔し少年の頃父の命に依つて肥前長崎に遊び松浦玄齋の門に入り蜂須賀玄齋と名乘り和闘陀の妖術を學びたるを幸ひに此度其妖術を以て土民を惑はし一揆を

〳〵企て花々しく立花家を打滅さんと謀りしに事半ばにして邪奉行に爲に怪しまれ、遂に此國を追れました、去れど無念は去らず如何にも爲て立花家を滅すこと能はずんば若殿をのみ一ト太刀怨み奉らんと玄齋と云ひし頃の姿をサラリと替へ髭を落し髪は伸して武術修業の浪人と成り、樣子を伺ふ其内に聊か手前に一臂を添へる者六人出來たれば今は力强しと先つ頃若殿枯野御見物の時に不意に起つて命を頂戴せんと切付けたるに三人の勇士の爲に支へられ若殿に一ケ所の傷も負せずして斯く戒めの身と相成り斯の如く然し事は成らずと雖も斯迄に心を盡さば冥土黄泉に於ても主君並びに父も共に悦び居るでござらう、サヽ早う首を御刎れ下されハヤ外に申すべき事無し」と始めて明かす勇士の精神、重兵衛ばじめ並居る人々ハラ〳〵と涙を流しアヽ一實に忠勇義膽の武士とは此事か敵にして憎き者は味方にすれば必ず可

愛さ者、當家に對しては不届き至極の者とは云へど我一身を捨て家中の者に悪ざまに云はれ殿へ不忠のやうに見せ掛け後々板倉家の迷惑に成らんやうに涙人をいだして先君と父との無念を雪がんと云ふ實に感心な者追つて沙汰に及ぶ能うこそ申された……アヽコレ〳〵晋作といふ人に手當をいたして置けヨ』とガラッと變つて充分の御手當でございます、轟木重兵衛から左近將監様飛彈守様に有休の義を言上をいたしまするとと左近將監様は左に憎い奴である板倉家に對して掛合に及んだら宜しからう」と怒られた飛彈守様は暫く考へてをはしたが飛彈「父君暫く待ち下されアヽー予が若氣の至り御評定の御席に於て内膳正殿が二度目御名代伊豆守參るに就て武士の面目江戸表へ戻ることも出來ず合來配で戦さの掛引をいたせといふ上意であるが何んの面目あつて伊豆守に面を合さんと御相談に成つた時に拙者が

僅た一言だが悪いことを申上げた、予の一言で元日の討死をなさらうといふ決心に成つたのであらう、亦拔掛けをなされた時に吾々共が共に力らを盡したならアヽ成るのでは無かつたが臣の身として吾を覘うは至極道理の至り其罪を憎んで人を憎まづ、我家來にも重兵衛はじめ忠義の侍はあるが、彼と内膳正重信殿は不忠な者、不埒な者と思ふてゞあらう今此所で彼を殺さば忠義の明りは立づして狗侍で終つて仕舞う、予は其晋作を助けて内膳正殿に使者を遣わして晋作の忠義なる事を話し召戻さして生涯彼に忠義を盡させたいが重兵衛其方は何んと心得る、武士の情けとしては晋作は殺す に忍びない見ぬ唐の文天祥にもチサ〳〵劣らざる武士である其方は如何思ふ重兵衛……』重兵衛涙を飲して 重『夫でこそ恐れながら明君拙者も仰せ最も然るべし』と存じまする私此使者相動め升るで御座らう』

○第二十二席

板倉の臣遂に刺客なりし始終を語る
三勇士終りを全うし主家復た榮う

其所で權三八郎が是に就ては骨が折つて居るから晋作は兩人へ御預けに成つて此福富晋作は充分に御手當藤木重兵衛は江戸へ出府して内膳正重信殿へ御目通りを願う、板倉家じやア驚いたれ、使者なれば使者の役があるが老職が來るとは變挺だ、何んの用か知らんと御家來御相談をなさる、重兵衛どの板倉侯へ御目通りをして内膳正様御懇ろのお言葉使ひ重兵衛謹んで　重「此度罷り出でましたは御當家の大忠臣福富晋作の事に就て出ました　殿「イヤ〳〵如何にも太郎作の悴に晋作といふ者はあつたが彼は大不忠臣の者で親は我父と共に戰死を爲したる殊功のある者であるから成可くは罪に落したく無いと心得たが餘りと云へば不埒の者なるに依つて彼は追放を

申附けた　重「夫は表向き、其實福富晋作と云われる者は御當家に對しては大忠臣の者でござる其理由は是れ〳〵云々と有し次第を物語る、内膳正様は始めてお聞遊ばして御膝を涙もて濡す位い　重信「偖て〳〵彼れは是程の忠心あるを……とは知らずして今日迄仇に思ふて居たは如何にも不憫な者であるワイ、今が今迄不忠の侍と思ふて居つた然し思ひ出さぬ日とては無しア、若氣の至りで酒狂に乘じ女子に對して不出來しなことを爲たに依つて追放はしたやうなもの〻父と共に死した忠臣の悴今頃はいづれの國に居るじやらうと思わぬ日は無かつたがア、臣を見ることを知らん予が生涯の過りであつた、能うこそ重兵衛殿遠路の所を出府をなされ當人が不届きの罪を許し下し置かれ彼の爲に歸參を願まれるの段内膳深く御禮申す何とて異存のあるべきや、御懇ろの御使者辱け無く存ずる御出府有之候時は予必ず

罷り出でゝ御禮申す宜しく……」と充分重兵衛に對して御馳走をし乙重兵衛も悦んで立歸り、殿に此由を申上げて晋作は板倉家へ送り届け其後立花飛彈守御出府のあつた時に板倉内膳正殿が御舘へお出であつて種々御禮を申されたといふ、偖て若殿飛彈守が既に危き場合を御助け申せしは關口八郎、野里權三、蟲木重兵衛の三人、改めて左近將監御隱居飛彈守殿御世繼といふ時に重兵衛は百石、權三八郎は五十石づゝの御加增を賜づて何れも劣らぬ武術者と家中での評判、人立花の三勇士と云つて居つた、然るに立花侯一日板倉家に於て御酒宴の折入らせられたのが南部大膳太夫四方山の話しの末　南部「立花侯に少々伺ひたい事がある予が家臣關口八郎と申す者は石田の殘黨を隱まつたる罪を以て永の暇申附けた然るに當時立花の御家にありといふ事を承知いたしたが如何の事や」と云つて南部侯から立

花侯へ御問合せのあつた時に　立花「遂申遲れて居つたが彼は決て去る者に非ず是々云々全く讒者の申す所に違ひ無からうと存ずる依つて二君に仕へずと申すのを予が強て臣下に致して居り升　南部「アヽ左樣か予も跡に至つて其事を承知いたし以悔いたしたが然し今更召戻すも如何、彼に子があらば南部の家に對して關口の名を付けて御戻しを願ひたい　立花「委細承知いたした」と其所でお諸侯仲間で話しが出來て關口八郎の惣領を立花家から南部家へ送つて是が後南部に關口の姓を立つて忠義を盡しました、引續いて亦一子を儲けたから是を育てゝ己れの世嗣となし武藝を仕込んで八郎が後見と成つて立花家に仕へて居つた然し是は彼のお話し、其後關口は南部の殿樣に御目通りを致して久々で大膳太夫樣から御盃を頂戴いたしたといふ重兵衛は勿論のこと野里權三に於ても緣あつて妻を迎ひ問も無く女子を儲け

成長の後是に望を取り己れは六十の坂を越て死去されたと申すこと、然らば三名共にお家に忠義を盡したから立花家は大盤石、明治の今日迄華族と成つて歴然として居りますれば三名の子孫も定めて同家に殘つて今猶ほ繁昌いたし居ります事でありませう、永々口演いたしましたる立花家三勇士といふのは豫め是にて結局といたしましようヱヽ御退屈さま……

立花家三勇士

終

明治四十四年九月十二日印刷
明治四十四年九月十五日發行

立花家三勇士

不許複製

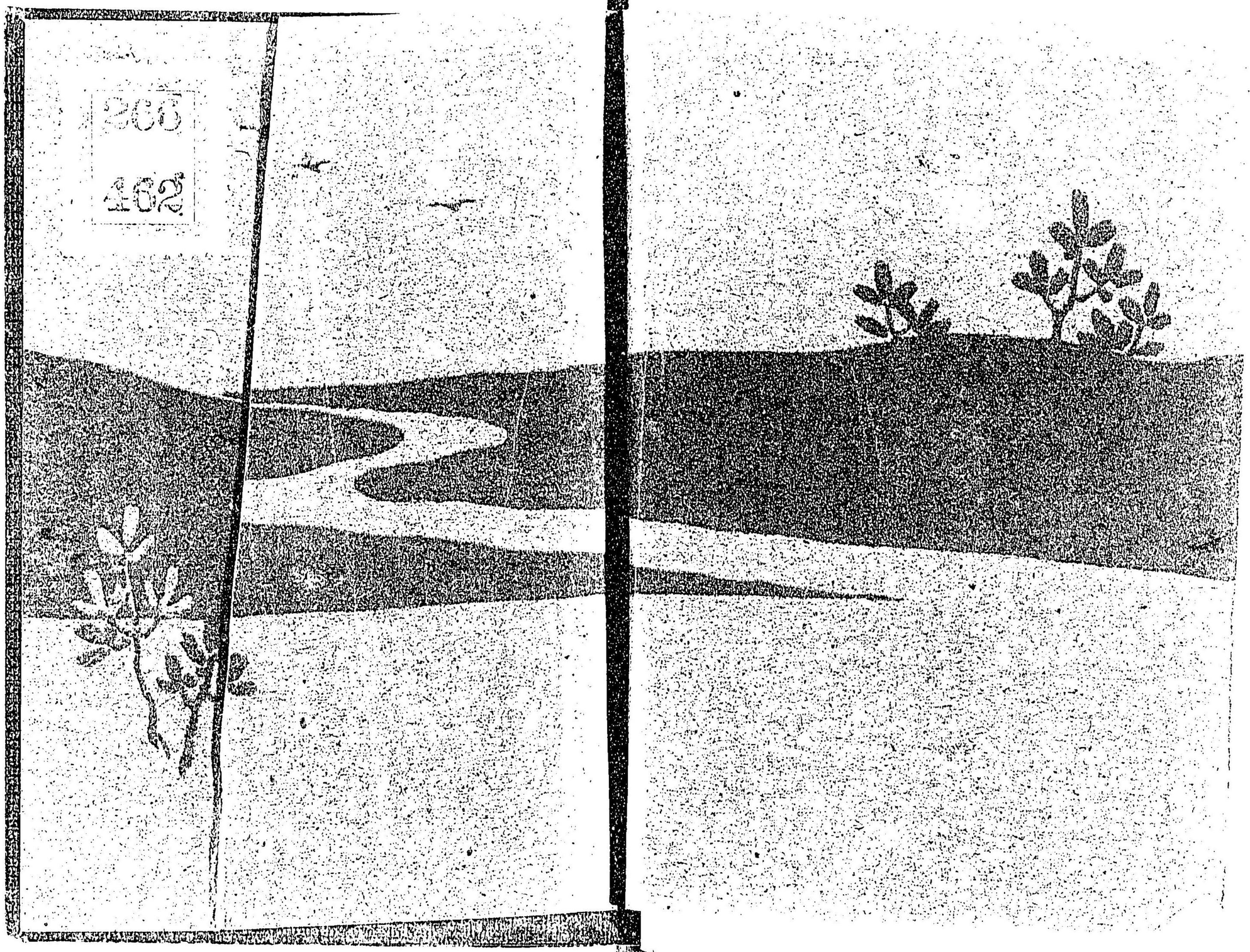
著者　講談倶樂部
東京市淺草區旅籠町二丁目七番地
發行者　中村惣次郎
東京市神田區表神保町拾番地
印刷者　今成温平
同所
印刷所　今成活版所

發兌元
日吉堂
東京市淺草區旅籠町二丁目七番地
定價金貳拾五錢　郵税金四錢

講談文庫目錄

赤穗義士銘々傳　俠客小金井小次郎
大久保彦左衛門　立花家三勇士
朝顏日記　寛政御前試合
俠客殿樣源次　德川天一坊
惡七兵衛景清　俠客頼朝小僧
水戸黄門記　淺山一傳齋
宮本武藏　笹野權三郎
曽我兄弟　小栗判官

定價各册　金廿五錢

郵税各册　金四錢

263
462